

心した。

「私はお昼はあまり頂きませんのよ」

「まあ、そんなことおっしゃらずに」僕は鷹揚に言った。

観劇中に彼女と目があった。幕間になつて、彼女の手招きに応じてそばまで行き、腰

を下ろした。この前会つて以来長い年月が経つていたので、誰かが彼女の名を口にしなかつたら、とても気付かなかつたことだろう。彼女は明るく言った。

「最初にお目にかかるから随分になりますわ。光陰矢のごとし。誰しも段々若くな  
るわけじゃありませんわ。最初の時のこと、覚えていらっしゃる？ ランチに誘つてくれ  
ださいましたわね」

覚えているかだつて？

二十年も前のこと、當時僕はパリで暮らしていた。ラテン区にある、墓地に面した

安アパートで、何とか生活できるだけの収入を得ていた。彼女は僕の本を読んで、感想

を書いてきたのだった。感謝の返事を出した。まもなく彼女から、パリ経由でどこそこ

に行くので、お話しできれば嬉しいと言つてきた。ただ、時間がなく、空いているのは

次の週の木曜日だけだということだった。午前中はリュクサンブル美術館を訪ねるの

で、その後フワイヨでランチをご一緒できないかといふ。フワイヨというのは、フラン

スの上院議員が行くような高級レストランで僕など行こうなどとは夢にも思つたことす

らなかつた。しかし誘われて嬉しかつたし、まだ若くて女性に向かつてノーといふすべ

を知らなかつた。（大抵の男の場合、その方法を学ぶのは、彼からノーと言われてもイ

エスと言われても、女がどつちでも気にしないような年齢に達してからである）。当時

僕は月末まで生活するのに八十フランしかなかつたが、簡単なランチならせいぜい十五

フランくらいだらうと思つた。二週間コーヒーを我慢すれば、何とか食いつないでいけ

るだらう。

こう考へて、手紙で木曜日の十二時半にフワイヨでお会いしましょと連絡した。彼

女は期待したほど若くなく、魅力的といふより堂々とした外観だった。事実、四十歳だ

った（それなりに魅力的な年齢だが、一目で身を焦がすような恋心を搔き立てる年齢で

はない）し、それに歯が気になつた。きれいに並んで、白くて大きく、何か必要以上に

沢山あるような印象だった。口数が多かつたが、主に僕の作品の話なので、熱心に耳を傾けた。

メニューを差し出されて、はつと驚いた。予想外の高さだった。だが彼女の言葉で安

心した。聞くとちょうど荷が入つたところで今年の初物ということだったので、彼女のために注文した。ボーカーはサーモンを用意する間に何か召しあがりませんかと彼女に尋ねた。「いいえ」と彼女は答えた。「一品以上は頂きませんの。キャビアがあれば、ほんの少しお昼はあります。」

しなら頂いてもいいけれど。キャビアなら構いませんわ」

これには気落ちした。キャビアは高価で、その余裕はなかつた。しかし彼女にうまくそれを伝えられなかつた。ボーカーに是非キャビアを持ってくるように命じた。僕自身のためにはメニューに載つていた一番安価なものを選んだら、羊の骨付き肉だつた。

「お肉を召し上るのは賢明ではありません。そんな重い食事の後ではお仕事が進ま

ないので、お肉を召し上るのは賢明ではありません。そんな重い食事の後ではお仕事が進ま

ないので、お肉を召し上るのは賢明ではありません。そんな重い食事の後ではお仕事が進ま

ないので、お肉を召し上るのは賢明ではありません。そんな重い食事の後ではお仕事が進ま

ないので、お肉を召し上るのは賢明ではありません。そんな重い食事の後ではお仕事が進ま

るので、お肉を召し上るのは賢明ではありません。そんな重い食事の後ではお仕事が進ま

ないので、お肉を召し上るのは賢明ではありません。そんな重い食事の後ではお仕事が進ま

した。

「重いランチを召し上がる習慣ですね。間違いではないかしら。私のように一皿になさればいいのに。その方がずっと健康的ですね」

「僕はおっしゃる通り一皿ですよ」ボーアイがまたメニューを持ってきたときに言った。  
彼女は軽やかにボーアイにいらぬいう態度を取った。

「ふえ、ええ、結構よ。ランチには何も頂かないですから。ほんの一口だけ。それも会話が滑らかに進むように。もっと頂くなんて、とても無理だわ。ただ、大きなアスパラガスだったたら別ね。パリまで来て、あれを頂かずに帰国するなんて心残りですも

の」  
心が沈んだ。店にあるのを見ていたが、ひどく値が張るのを知っていた。見ただけで

口から涎が出てきたものだった。

「大きなアスパラガスがあるかどうかと、マダムがお尋ねだ」僕はボーアイに言った。  
何とかボーアイにありません、と言わせようと懸命に努力した。ボーアイの牧師のような

大きな顔に会心の微笑が広がった。とても見事な大きく、柔らかいアスパラガスが入荷してありますと言った。

「お腹は少しも空いていませんけれど、どうしてもとおっしゃるのなら、そのアスパラガス頂いても構いませんわ」

僕は客のために注文した。

「あなたは召し上がらないの？」

「アスパラガスは食べません」僕が答えた。

「嫌いな人がいますね。あなたの場合は、沢山お肉を召し上がるから、味覚がおかしくなっているのでしよう」

「アスパラガスが調理されるのを待った。僕は恐怖に襲われた。月末までいくら残るかというところではなくなった。今日の支払いができるかどうか心配になった。十フラン不足で客に借りるというようになつたら、屈辱的だ。自分の財布に幾らあるか正確に分かつてていたので、請求書が来て払えないと知つたら、ポケットに入れる、大袈裟な身振りで立ち上がり、拘られたと叫ぼうと心を決めた。もし彼女もそれだけの金を持ち合わせていかつたら体裁が悪いことになる。その場合は、時計を預けて、金を取

りに行くと言ふしかないだろう。

アスパラガスが運ばれてきた。巨大で、瑞々しく、美味しそうだった。溶けたバター不減の神の配慮ならば、結果を満足して眺めても許されよう。現在、彼女は三百ポン

の香りが僕の鼻孔をくすぐった。エホバの鼻が高潔なユダヤ人の信者の供え物の香りでくすぐられたのと同様だった。夢中で食べる彼女が大きなうまそうなアスパラガスを喉に押し込むのを眺めた。それでも僕はいつもの丁重さを失わず、バルカン半島の演劇の状況を語った。ようやく彼女が食事を終えた。

「コーヒーはいかが」僕が聞いた。

「そうね、コーヒーと一緒にアイスクリームだけ頂くわ」彼女が言った。

僕はもう気にしなかった。自分にはコーヒーを、客にはアイスクリームと一緒にアスパラガス注文した。

「あのね、お食事について私は信念がありますのよ」アイスクリームを食べながら彼女が言った。「食事が終わつたとき、もう少し食べようと思えば食べられる、という思

「まだ空腹でいらっしゃいますか？」僕がか細い声で聞いた。

「あら、違いますわ。私はランチは頂きませんの。朝コーヒーを一杯、その次は夕食です。でもランチは一皿だけです。あなたのために言ったのです」

「なるほど、そうでしたか」

それからじきりとするような事態が起きた。コーヒーを待つ間、ボーアイ長が追従笑いを浮かべて大きな桃で一杯の籠を持って歩みよつた。桃には無邪気な少女の恥じらいがあつた。イタリア風景の重厚さもあった。しかし桃はまだ早すぎるのでは？ いくらするか、神のみぞ知るだ！ でも僕は知る羽目になつた。というのは彼女がお喋りに夢中で、ふと一個籠から手にしてしまつたのだ。

「あなたはお肉を沢山召し上がつたから」——僕のちっぽけな骨付き肉——「もう無理ね。でも私は軽く頂いただから桃の一つなら大丈夫よ」

請求書が来た。払うと僅かなチップ分しかなかった。彼女の目は、たつた三フランのチップに注がれた。けちだと思われたのが分かつた。しかし、レストランを出た僕は月末でまだ日があるので、ポケットにはもう一文もなかつたのだ。

「私の例に倣いなさいませ」彼女は別れの握手をしながら言った。「ランチには一皿以上は駄目ですよ」

しかしより、僕は今日の夕食はどちらにしますよ」僕が言った。  
「面白い方ね！」彼女はタクシーに乗り込みながら、明るく言った。「本当に面白い方！」

しかしそうやく復讐を遂げた。僕は特に復讐心が強いほうとは思わないが、これがの体重なのだ。